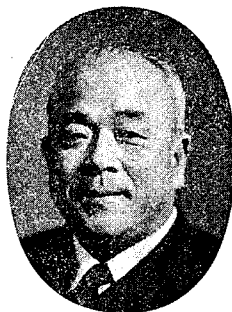


小田原史談

第51号

発行所 小田原史談会
小田原市内3-22
郷土文化館内

年頭のことば



小田原市長(史談会名誉会長)

鈴木十郎

近代回家への道を
今日まで歩み続け
てきたものだとい

昭和四十三年の新春を迎え、謹んで御祝辞を申し上げますとともに、小田原史談会の会員の方々が、それぞれにご多忙な職務や職業の中を、寸暇を惜しまず史蹟の調査研究に努力されていることに對し深く敬意を表するものであります。

今年には明治百年に当るということで、国をはじめとして各方面でいろいろな記念行事が計画されておりますが、ふりかえって見ると明治維新以来わが国がよくも百年の風雪に堪えぬき、

三十五年の大海嘯、大正十二年の関東大震災を始め、幾多の災害を受けながらも次第に発展の道を辿り、特に戦後二十余年の間にいちじるしい躍進を上げてまいりましたことは、ひとしく皆様の認めるところであります。

う事を、今更の如く感ぜざるをえないのであります。それと同じことがわが郷土小田原についてもいえるのであります。その昔、北条氏の覇府として、また、大久保氏の城下町、東海道五十三次の重要宿駅として

繁栄して来た小田原が、明治二年の藩籍奉還にもな心、単なる西湘地方の一中地となつてしまつたこととは余蘊ないことではありませんが、それ以来、日清、日露、その他國を賭しての戦争に遭遇し、或は、明治

そして本市が今や人口十五万を超え、神奈川県西部における近代都市として往時の繁栄を再現しようとしている事は、まことに同慶に堪えないところであり

しかしながら、この時点に立って将来を展望し、近代都市建設の使命を達成し

頌春

新春自晴梅花綻
松石竹水福寿草
明治百年猿肱伸
年頭重杯屠蘇芳
昭和戊申正月

史談会副会長

清水専吉郎

ようと思う時、そこに政治、経済、文化その他各般にわたり困難な問題が山積してあり、正に本市が一大転換期に直面していることを痛感しないわけにはいきません。

幸いにして都市発展の基礎ともいふべき道路交通の面において、東海道一号国道の交通難緩和の為の西湘バイパスをはじめとして、東名高速道路に直結する厚木、小田原線、その他各幹線道路が次第に整備されつつあり、また、鉄道の面においては、東海道新幹線の乗降客は日を追って増加し本市発展に寄与しているばかりでなく、東京、小田原間複々線化の計画も進められております。更にまた、多年の懸案であった県営小

田原漁港もいよいよ竣工する事となつたのでありまして、これらが完成の既には海陸交通に一大変革がもたらされることは必至であります。これら交通の面だけを見ても、現在の本市が躍進への転換期に立っていることは明白な事実であり、これに對処し、将来の発展にむかつて進むためには、本市の現状を正しく認識し、今後の方向を正しく認識し、的確に把握しなければならぬのであります。

それには、過去百年の小田原の発展の歴史をかえりみ、本市の独自性を探究することも極めて肝要なことでありまして、たまたま明治百年に際会したことは、そのもっとも好き機会であると思ふのであります。

明治百年に際して

清水専吉郎

史談会の方々が永年にわたり調査、研究してこられた業績は、この意味においてまことに貴重なものというべきであります。本年は更に一層の活躍をされ、本市発展に寄与されるよう願つてやまない次第であります。

昭和戊申四十三年即ち明治百年(皇紀二六二八西歴一九六八)に當り、明治戊辰の大転換期を遙かに省察して、徳川幕府三百年の鎖国大平の夢覚めし如く隔世の感あり、幕末諸藩はその就去に迷ひ、大困乱に陥れる様相を忍び、明治維新の大改革の非常時期を追想す勤王、佐幕、両論の軋轢を経て、御幼少の明治天皇の御東行に世は治まり、江戸に遷都せられ、東京と改まり、明治、大正、昭和と三代に亘る変遷を見るにつけ、封建機構の解消、家族制度の廃止、民主主義の勃興、自由主義の過剰、等々

の一世紀に当面して先人を追憶し、温古知新以て吾人は将来に備えんとするものである。

慶応三年大政奉還となり翌四年即ち明治元年（皇紀二五二八西歴一八六八）戊辰五ヶ条の誓文に明治維新の大業成り、所謂文明開化時代を経て、日清、日露の戦捷を獲得し、日韓合併、満鉄の業等國威揚れり、それより第一次大戦、関東大震災を克服せるも、満州事変、支那事変より太平洋戦争に入り、惨々たる辛苦を國民は身に浸みて味わい、大敗焦土を漸やく建て直し半世紀の後退を急速に取り戻し、今や寧ろ戦前に増して物資並に國勢の進展せるを見て転た感慨を深うする

慶応と明治初年に吾が小田原も亦、武士も町家も困惑し、変革せる有様を今更に想い反さんとす。即ち當時町家は脱走組に恐慌し、武士は藩論と俱に困乱し、官軍、いづれえか就去に迷蒙し、大なる犠牲者を出し遂に時勢に押されて、山崎合戦、箱根關所の戦等、当小田原が明治維新に關連する處を近き機会に歴史の専門家に此史談誌へ詳記され

たく希うものである。小田原の交通が人力、馬車より馬車鉄道となり、電気鉄道と開化し、進んで自動車に汎濫に軌道は撤去せられ、バス交通となれる変転や、國鉄の御殿場線より転じて小田原が東海道本線となり、今は新幹線の超特急停車駅となれる発達などそれにつけての宿場街の盛衰、町村より市制への進展等「明治は遠くなりけり」と雖も連想すれば吾等の遭遇せる時代に於て、身近の事の回顧に指呼の間と思はる。

折しもあれ当史談誌の五十号を越ゆるに際し、小田原史談会の明治百年記念事業として、各自の身近に見聞せる事柄を、昔話形式にても結構、寺小屋と学校初期の経験とか、地域の変遷近所隣りの変り様、昔よりの云い伝え、其人の祖先、昔の出来事、消えなるとして現に続ける場所、有名な屋敷跡、残し置きたき物語、等々所調野史の貴重さを纏めて冊子と為すべく、昨年十月及び十二月の理事會に於て此計画を取決めたれば史談会の各位は奮って御寄稿あらん事をお勧めす

る。私は關係ある北家時代豆州下田の鶴島城跡の事、十六代の祖先の事、小田原宿の本陣、脇本陣の事、明治天皇御東行御宿の事、小田原駅通より郵便局創始の事、小田原藩曲界の藩時代より今に至る事蹟、などの身近かなるものを記載する所存である。

あれど、明治維新業蹟の価値は昇るとも降るものにはあらず、其偉業を讀み有終の美を齊すべく、其基礎に立って誤らず、以上の値打の出づるやう後人の努力することを肝要である。

今此期に於て当史談会各位、一人も多く見聞せられたる史実を執筆せられて明治百年一世紀の一翼を担はれたく、且又此時代に生れ会せたる足蹟を止められ後世に伝へ遺さるべく多数各位の原稿を寄せられん事を切望する。

機関士はイギリス人で、夫は日本人であったので、濱の両駅（当時の人々はステンションといっていた）に文武百官を従えられて臨御され、盛んな開業式が行なわれたのであります。この九月十二日は太陽歴で十月十四日にあたりますので、國鉄ではこの日を「鉄道記念日」と定めて、去る十月十四日には第九十五回目的記念式を盛大に催して鉄道につくした人々の表彰を行ないました。

それから十五年を経た明治二十年七月一日に國府津駅まで、次いで二年後の明治二十二年二月一日に、松田山北等の山線經由で東海道線が静岡まで延びて、東海道本線は完成したのであります。

小田原駅開設

四十七周年の思い出

額田喜代春

今日は四十七年前の大正九年十月二十一日に、小田原駅が開業された日でありまして、その思い出を、消え去ろうとしている記憶をひきだしてみます。

百四十二年前の一八二五年九月二十七日に、世界に始めての鉄道が、イギリスで運転されたのですが、それから四十七年後の一八七二年即ち、明治五年五月七日、

（旧歴）に品川から横浜（今の桜木町）まで、一日二往復で仮りに運輸營業が始められ、当時の人々々は、岡蒸気が黒い土を燃して、火車で鉄の路を走っていたので、あれはキシタンパレンの魔法で走りしているのだとか、切手（當時は乗車券のことを切手といっていた）を買って、ホームに下駄を脱いであがったり、

物駅）まで延長されて、一字間（當時は時という文字は使われなかった）おきに新橋と横浜の相互から九回運転され、運転時間も現在では二十分位の区間を、五十四分、賃金（只今では運賃という）も下等三十七錢五厘（當時はお米が一斤三錢か四錢位）とったといいますが、現在の運賃と比較いたしますと随分高かっ

たようですね。そして明治天皇が新橋と横浜の両駅（当時の人々はステンションといっていた）に文武百官を従えられて臨御され、盛んな開業式が行なわれたのであります。この九月十二日は太陽歴で十月十四日にあたりますので、國鉄ではこの日を「鉄道記念日」と定めて、去る十月十四日には第九十五回目的記念式を盛大に催して鉄道につくした人々の表彰を行ないました。

当時どうして風光明媚な西湘地帯小田原經由の海岸線を避けたのかといいますが、理由はいろいろあったようでありまして、主なるものとしては、箱根を越えるには箱根峠、足柄峠、御殿場峠の三つのうち、どれかを選ばなければならなかったのですが、当時の土木技術では、一番容易な御殿場峠がよいということになって

遂に小田原地方は鉄道文化の思恵から、おいてきぼりをくってしまつた。

そこで町内の老舖栝榎屋薬局の先々代の吉田義方さん外数名の方々が、発起人となつて国府津から小田原を経て湯本まで、鉄道唱歌にもあるように一國府津おるれば、馬車ありて、酒匂小田原遠からず、箱根八里の山道も、あれ見よ雲の間より」で湯本まで馬車鉄道が開通したのであります。

僅かに之によつて、京浜或は關西方面との足の連絡がとれたのであります。うとしても鉄道がほしいというので、各方面の有刀者が政府に運動したり、政府においても、時勢におされて海岸線が必要であるといふことになつて、箱根別線といふ名称で、明治四十二年十一月から、約二ヶ年近くかかつて、実地調査と測量が行なわれ、建設可能であるという見通しがつきましたので、明治四十四年の第二十八回帝國議會で協賛を得、大正五年十二月一日から、熱海線建設工事が始められたのであります。処が第一次欧州大戦に遭ひ、物資の調達困難と、勞務者不

足になやまされましたが遂に、國府津から小田原まで六キロ二分を、約六十五万八千円の工事費を費して線路並に大きな施設としては酒匂川鉄橋が約百三十九万円などを投じて完成したのであります。

そして大正九年十月二十一日に海抜約十三米の処に永年にも亘つての念願の小田原駅が開業の運びとなつたのであります。当時小田原駅を何処に設置するか、二つの案が出されました。

それは旧緑三丁目の寺町寄り、と、県立小田原中学校々庭と辻村農園の敷地案があり、相当難行しようであります。結局は敷地の広い方がよいといふことで、中学校庭と辻村農園敷地といふことに決つたのであります。

なお小田原駅のホームと構内線路の工事費は約四十万三千九百七十円と、駅舎その他の建物の建設費は約二十万五千二百八十八円でありましたが、当時の大工の手間賃が三円で、普通の入夫賃は一円九十銭位でした。こうして当日は冷い秋雨がしとしとと降つておりました。なにしろ三十二年ぶ

り、小田原町民二万三千人待望の岡蒸汽がはじめて聞くピーポー、シュッ、シュッと三両か四両位の客車と数頭の貨車をひっぱつた混合列車の汽関車の前頭に國旗を掲揚して、黒い煙を吐きながら國府津駅から六・二キロの酒匂平原を小田原ステーション（当時の人々はステーションといわなかつた）に入つてきたのです。から、サア大変沿道は小旗を振つて、列車の乗客と相呼応して破れるような騒ぎでした。当時は単線でしたからタブレットという運転上の安全方式を採用して居りました。

一方町内は各町内、いろとりどりの催物で山車、屋台芸伎の手踊り、老舗では歌舞伎その他鉄道に因んだ人形を飾り、富士屋自動車では自動車に汽関車を真似て飾付をして宮下から小田原間を走らせたり、駅の広場にも模擬店或は演芸場等をつくつて祝つたので、近郷近在の老幼男女が、孫子の代までの語り草とばかり腰弁当で、見物に来るやら、國府津まで汽車に乗るやら、で、二十一日から三日間の祝賀風景は大変な賑わいで

ありました。当時の出札窓口は一、二等と三等の二つで東京までの乗車賃金が二円三十二銭だつたと思ひますが、或る日のこと、田舎の老人が二銭の端したを、まけろ、いやまけられないで問答し、あげくのはてに、どこあきんどでも、二銭や三銭のはした銭はまけるではないか鉄道という処はけちんぼだ

な——とののしつたり、或は汗を拭き拭きあふたと馳也こんで来た一人の旅客が「オダワラをくれ、いくらだい」、出札掛員もひょきん者であつたので「ナニオダワラー、ロハでいいよ一応答したので彼氏「田舎者だと思つて馬鹿にするなよ」「だつてお爺さんここは小田原だよ、だから汽車に乗らなくてもいいよ、だからロハでいいよ」といつたので、きまりわるげに更めて目的の乗車券を買つていつたような落語を地で行つたようなこともありました。

或は改札掛か列車の出発を失念し、改札をしないで空気がかりを載せて國府津まで走らせ、乗りおくれたお客さんを自動車で追いかけて、國府津駅で本線の列車に間にあわせたり。当時の貨物積卸場出入口は舗装がしてなかつたので、雨が降ると馬も馬方も膝まで没するといふ始末で、馬方はムチを打ち振り、馬をしかつたして運搬しておりました。が只今なら早速動物愛護協会あたりからおごとを頂くことでしょう。

小田原史談会秋季史跡めぐり甲州路

史談会副会長 清水専 吉郎

長秋九月三十日早朝バス一行五十名北条氏と武田氏の跡を訪うべく小田原駅を出発し箱根山越え甲州へ向う。

初代駅長は杉田武造氏で後に新橋と横浜駅長に歴任しました。実におだやかな人格者で非常に部下を愛した方で、私は駅長秘書として二年ばかり働きましたが一度もしかられたことがなかつた。

（昭和四二、一〇、二二 記、元小田原駅勤務）

時山の狂歌などあり一同胸襟を開く

とつ圍の別荘地かも仙石原 すゝきおちこち白垂家々

乙女峠の展けし新道と隧道を走りぬけ、山上の高所より急に展開したる眼下の御殿場の市街に目を見張る

この乙女峠のみのちの滑らかさ 昔の難儀いま車たのし

御殿場の街、忽ち狭き車の流れの中に這入り混雑を抜けて、一本杉の伝説の道を通り滝ヶ原に出て、未だ荒らざれる自然美もあり

裾野のみ澄める流れの山

金時山の見ゆる仙石原を過ぎて井上会長より即興の金

あいに、いしくも残る清
き山葵田

富士演習の自衛隊の戦車に
路を避けつゝ須走の浅間神
社を横に山道に入る

秋草はいるとりどりに裾
野原、ゆく手の道を飾り
たてつゝ

富士あざみ風にかよめど
花は濃く、ひとつひとつ
に研きすまされぬ

山の嶽かわゆらしくも咲
きいで、いまだ零れず富
士の長月

籟坂時にかゝり立木講師よ
り、北条武田第一戦の攻防
の陣の話に往時を此地に偲
び、山形を見廻し乍ら山中
湖に出づ

山中湖黒き砂浜水すみて
しづもる秋の深ひととき
から松とほり椈の木か湖
水みち、埃はらいて櫛か
きならぶ

このあたり、おしの温泉、
鐘山の滝洞窟ありと聞くの
みにて、木の間草の道を過
ぎて、火祭りに名高い富士
吉田に着く、奥深き浅間神
社を脇に立ち並べる町屋を
通る

ひと昔風にそなえし屋根
石の、いま見あたらず文
化の家並

程なく河口湖に到れば富士

のみ末だ雲に覆はれ秀峰に
期待つゞけつゝ

さかさ富士けふはうつら
ず河口湖、雲の暮間のな
がき袈裟ぞ

富士五合目のお庭に登るバ
スの路線をあれぞと指しつ
湖辺の町に入り土産屋の櫛
比する旅館街の狭まき繁華
街を幸うじて通過し、湖面
眼下に勝景の山道を登り三
坂峠にかゝる。戦国攻防の
往来難所なりし峠が今文化
の光り明るい隧道に手安く
甲州に入り、聖徳太子の黒
駒の伝説、甲斐駒の昔話、
黒駒親分の家跡の話の内に
石和町に着く、笛吹川石和
川の橋を渡り向いの鶴飼山
遠妙寺の前を過ぎ、日蓮上
人鶴飼漁夫成仏の謡曲、鶴
の段の一節を講ぶ、車掌の
語る笛吹川の伝説の話のう
ちに甲府善光寺に到着す。

信玄が信州善光寺の戦渦の
代償として氏善光寺を造営
したると、又御堂の下なる
戒壇めぐり所謂御詣詰めぐ
り又は暗闇の地獄めぐりに
階段を降り右へ曲り真くら
き中に小さき錠を手さぐり
漸やく出て、目開きへの戒
めを解かれし如くホットし
明るさの悦びを味う

めしいなばあの暗闇のつ

とくらむ つねのみ光り
いまでもにしむ

塩山市のみに山容よき地
名の小山あり

塩山はみちの端近く駒立
ちて、山の斉松は立髪の
ごと

恵林寺の優雅なる古庭園を
楽しみ、信玄の廟に其偉図
を用い、信長が勝頼を攻め
し武田氏の末路を偲ぶこと
久し

安禅不必須山水 滅却心
頭火自涼

の碑に快川和尚の雄魂を思
いつゝ其傍にて各自持参の
昼食を青空のもと愉快にと
れり。

古戦場の門あたり恵林
寺、柴焚く煙りいました
かなり

向嶽寺門前の幽邃の境にし
ばし目を止め、三島龍沢禅
寺を思い合わせり、転じて
五キロの山道を車にゆられ
雲峰寺に着く、こゝは大菩
薩峠の登り路として、リック
に颯爽と山に挑む幾組かに
話を交はす、古杉々々たる
二百段の石階を登り仁王門
を経て山上の本堂に寛ろぐ
茶を契しつ信玄の念寺の事
戦時の有様を聴く、信玄使
用のもの、孫子戦法の戦旗
疾如風徐如林侵

掠如火不動如山
二旒の所謂此風林火山の戦
旗を親しく見入り、尙お課
訪明神旗、馬印旗、日の丸
御旗章等数々の什物を目前
にして勇戦の様相を察し信
玄に接する感ありき

戦国の興亡のあとこの寺
に止めてうたゝ信玄
の像

本日の史跡見学課程の終了
に際し堂の縁側に参加者一
同笑顔の記念撮影をなす。

帰途渡辺ブドウ園に立ち寄り
折からたわわの葡萄を鑑賞
し各々口に含まつ

葡萄棚背のびに手頃房々
とつづらなる実を好み
にまかせ

うすもみち勝沼あたり葡
萄棚 軒並つゞき房々と
して

各自みやげに葡萄を持って
車上の人となり夕暗にも文
化の色明るき三坂峠を降り
路として河口湖を過ぎ山中
湖の秋景色に小休止し、御
殿場を走り過ぎて乙女路よ
りふり返り俯瞰すれば

秋の空に光り宝石ちりば
めて、ながるゝ如し御殿
場の街

美声の歌々面白く帰り路の
箱根を過ぎて

けふひと日昔をいまに生

きぬけり 史跡見めぐり
紅葉にはやく
紅葉にはやく
立木宗匠の口ずさむ古句の
辞
相あふてまたちりぢりや

史談会 予告

冬の雲
和氣詠々のうちに名残り惜
しみつまたの史跡めぐりを
約して散会す。
四二、一〇、一〇

新年会
昭和四十三年一月廿一日
午後四時 (日曜日)
会場 門島 綱一色二三三
電話二一五九七四
バス城東高校前下車海岸
会費 一〇〇〇円

豆相史談会
昭和四十三年三月十六日
(土)一十七日(日)
会場 万葉荘
(神奈川県中小企業従業員
会館)

湯河原町門川柳河原
電話(〇四六〇六)一三七
五五

日程 十六日 受付午後四
時
十七日 午後五時一午後九時
十七日 史跡めぐり
(貸切バス) 午前九時三十
分会場出発
コース 湯河原一太観山
一箱根旧街道一小田原板橋
一郷土文化館前解散一午後
三時頃

全日程参加者の会費には、
十六日の夕食代、宿泊代、
十七日の朝食代、十七日の
昼食代、史跡めぐりバス代
豆相史談会々費がふくまれ
ていますが史跡めぐりのみ
参加者の会費には十七日の
昼食代がふくまれていない
ので各自持参して下さい。